研究ノート

昭憲皇太后と津田梅子

――華族女学校での接点を中心に――

髙橋裕子

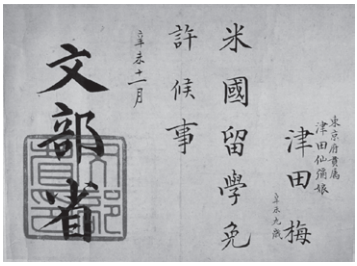
はじめに

昭憲皇太后と津田梅子（一八六四―一九二九）には女子教育を軸として少なからず接点があった。その接点は、津田梅子が最初の官費女子留学生の一人として米国に派遣されることと深く関係している。この留学の機会を得たことから、津田梅子は明治の女子教育を先導する役割を担うことになった。洋装化が始まる華族女学校の教員時代に、津田がどのような場面で皇后に謁見し、どのようなまなざしでその経験を語っていたのかを中心に本稿では紹介したい。(1)とりわけ津田梅子は、米国での育ての母ランマン夫人に帰国後日記のような書簡を送っていたので、その書簡に綴られていた記述を中心に用いる。

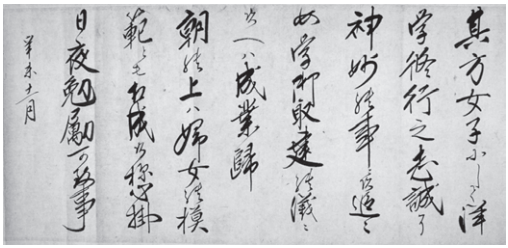
米国留学

女子留学生の派遣は、黒田清隆や森有礼の構想によって急遽決定された。開拓事業の視察のために訪れた米国において、女性の地位の高さに衝撃を受けた黒田は、短期間に構想を纏めて政府に開拓使建議書を提出し、その中で女子留学の必要性を説いた。人材育成の基盤には、教育のある母の役割が要であると判断したからである。開拓使次官黒田の建議書の中には次のような文章がある。

人材を生ずるは子弟を教育するに在り。今や欧米諸国は、能く子弟を教育するものと謂う可し。何となれば児子猶ほ襁褓に在り能く菽麦を辨ず。是れ他なし其の母已に学術あり、造次顚沛、必ず是に於てすればな



「留学許可状」
（津田塾大学津田梅子資料室所蔵）



「沙汰書」（津田塾大学津田梅子資料室所蔵）

り、然らば則ち女黌の設け、人材を教育するの根本にして、欠く可らざるの具なり。北海道の如きは、後来必ず黌を設け、人材教育の基を立てさる可らず。故に今、幼稚の女子を撰み、欧米の間に留学せしめんことを欲す。其の学資の如きは當使之を措辨せん。(2)

すなわち、女性にとっての学術の重要性が開拓事業の推進のためにも承認されることになった。

二度目の急募で選ばれた五人は一四歳から六歳までの少女たちだった。最年少が六歳の津田梅子。約一一年間の米国留学を経験し、生涯を通して支え合うことになる山川捨松（一一歳）、永井繁子（八歳）も五人の中に含まれていた。

一八七一年一二月二三日、五人の少女は岩倉使節団に伴われて渡米することになるが、出発の数日前に、皇后に謁見し、沙汰書とともに紋ちりめん一疋、菓子一折を賜った。士族の娘としては初めての謁見だったという。沙汰書には次のようにあった。

其方女子にして洋学修行の志、誠に神妙の事に候。追々女学御取建の儀に候へば、成業帰朝の上は婦女の模範とも相成候様心掛、日夜勉励可致事。

これら女子留学生が留学期間を終えて帰国した際には、女性の模範となるべく、米国で勉学に精進することへの期待が沙汰書に込められている。この日のことについて、梅子は二五年以上も時が経過した一八九七年、『シカゴ・レコード』（*The Chicago Record*）という米国の新聞に、自身の留学の経緯や初期の留学体験も含めて「解放される日本の女性」というエッセイを寄稿した。(3) その中には、皇后から賜った「もっとも貴い」沙汰書に、「わが国の女性のために外国に行き、学問を修める（go abroad to study for the good of our countrywomen）ことを命ずる慈悲深いお言葉があった」という記述がある。宮城への参内後、芝の日陰町で五人の少女は記念写真を撮影した。それが左の写真である。

官費留学生として一一年間にわたって政府から厖大な投資――一年に一人千円と言われている――を受けたことは父津田仙が梅子に何度も語っていたことだったが、留学前のこのような皇后謁見の機会も、津田梅子に女子留学生派遣が国家的プロジェクトであったという認識を促し、強い国家意識を内面化させる一面を持っていた。女子留学生も男子留学生と同様に、官費留学を通して得た収穫を日本社会に還元するという使命を担うことになるのだが、女子留学生にとっては帰国後の活躍の場がきわめて限られていたのが現実だった。留学先で期待されていた学習内容も含めて、その点が男子留学生の場合とは大きく異なっていた。女子留学生の米国派遣は入念に計画されたものでなかったからこそ、いきあたりばったりの側面が多かった。

「最初の女子留学生」
右側から吉益亮子、津田梅子、山川捨松、永井繁子、上田貞子。（津田塾大学津田梅子資料室所蔵）

華族女学校

一一年間の留学を終えて一八八二年に帰国した山川捨松と津田梅子は、開拓使も廃止され留学の成果を発揮する受け皿が用意されていないことに愕然とした。繁子はすでに婚約していたが、捨松と梅子の二人は、カルチャーショックも伴い、結婚か職業かという岐路に立たされ、身の振り方に焦燥感を覚えざるを得なかった。捨松は帰国後一年以内に大山巌と結婚することになったが、津田梅子は細々とでも教職の道を探り続ける決断をした。一七歳で帰国した梅子は、自身の意に沿わない結婚をすることに納得できなかったし、両親も結婚への積極的な働きかけはしなかった。いくつかの学校で英語を教え、伊藤博文家で住み込みの家庭教師兼通訳をした梅子は、帰国してからほぼ三年経過した後に、華族女学校で準奏任官として活躍の場が与えられた。梅子は、一八八五年九月に華族女学校に教授補として奉職する。伊藤博文から依頼され、設立準備委員の一人となった捨松にとっても、華族女学校は留学の成果を発揮する好機となった。

梅子は華族女学校で授業参観や学事に関する式等で美子皇后に謁見する機会を何度も持った。一八八五年一一月には華族女学校の開校式が開催された。津田梅子から育ての

母ランマン夫人に宛てた書簡（一八八五年一一月二〇日付）には、開校式の手前で、美子皇后の授業参観への対応を幾度も教示され、生徒にもどのように対応させるかを指示されていたが、生徒の方がこのような応対には明るいので、教員である梅子自身が生徒に作法を教えるのはおかしいとさえ述べている。挨拶、お辞儀の仕方などがよく飲み込めていないことなど、アメリカ人のような視点から、経験したことが書簡には淡々と綴られていた。英語の授業についても参観が実施されたようだが、美子皇后の興味を引くものではなかったようだ。式で美子皇后が立ち上がって読み上げた「お言葉」についても「ほんの少しだけ理解できた」とあり、「女子の教育、学校の必要性、教員と生徒がともに精進するように」という内容だったと梅子はランマン夫人に説明した。(4) また、一八八六年二月一一日の書簡には、事前の予告なしに美子皇后の華族女学校への行啓があり、男性の高官から新年の贈り物（白の絹生地）が平服の教員に手渡されたことが記されている。(5) 日記のような梅子の書簡から、美子皇后の華族女学校への行啓が頻繁であったことが窺える。

洋装化

津田梅子はランマン夫人に宛てた書簡の中で、美子皇后や女官の洋装について何度か率直な感想を述べていた。一八八六年七月一日には、「洋装が宮廷に導入されるということを聞いています。ヨーロッパに注文した皇后の衣装はもうすぐ届くそうです。これは本当のことなのですが、私ほど残念に思っている者はいません。」と書いている。西欧のものまねと笑い物にされることを懸念していた梅子は、洋装は男性だけで十分で、女性までもが洋装することに強い抵抗感を持っていた。「すべて伊藤氏が行っていることなのです。彼は行き過ぎていると思います。そのように彼に伝えたいのですが、機会がまったくないのです。」と梅子はランマン夫人に打ち明けた。(6)

アメリカの家庭で育まれた梅子自身、官費を投資された留学生であるいう責務から日本人としてのアイデンティティを強く内面化していたが、同時に、日本に帰国したときには日本語を喪失し、日本文化の深い理解もままならなかった。当時の米国の白人中産階級の「レディ」としてのハビトゥスを身に付ける環境に置かれた津田梅子は、このような逆説的な日米両文化の相克に直面しながら生涯を送ることになった。であったからこそ、日本の最も伝統的だと思っていた部分が、しかも梅子自身が理解できる女性の身体が、西欧化されることに強い抵抗感を覚えたのであろう。ヨーロッパの宮廷の様式を採用することを聞いていた

梅子は、とりわけ日本女性が深い襟ぐりにし、ウエストを絞り上げることに違和感を覚えると訴えた。[7]

美子皇后の洋装が国家的な戦略のもとで構想されていたことは、若桑みどりが精緻なリサーチに基づいた『皇后の肖像』の中で詳らかにしている。[8] 同書によれば、一八八六年「七月三十日、皇后ははじめて洋装で華族女学校に行啓」とある。[9] 同年八月一日付の梅子の書簡に、「洋装の流行を私は支持するものではありませんが、皇后は洋装がとてもお似合いでした。」という記載があるので、皇后の初めての洋装に、梅子は華族女学校の一教員として接する機会があったのであろう。洋装の伊藤夫人も同席したことが記されており、その日、仕えていた女官たちはまだ洋装ではなかったものの、これから洋装を始めることを耳にしていたようだ。「そんなことをするなんて愚かなことだと思います。」と梅子は忌憚ない意見をランマン夫人に表明した。[10]

「天皇・皇后の洋装肖像の創出が、日本の『文明』を眼に見えるようにすること、かつて多く論じられてきたように、『国民』に見えるようにすること以上に、まず西欧列強に対し自らの文明を視角化し、これを説得するための必須条件であった」と指摘する若桑は、皇后の大礼服にかかった費用を次のように述べている。

ドイツに注文された皇后の大礼服は総額およそ十三万円だった。総理大臣年俸一万円、鹿鳴館総工費十八万円だったそうだから、皇后の大礼服は、一戸の大建造物をつくるにふさわしい英断を必要とした国策であったことがわかる。[11]

日本の国際政策の一環として展開されていた皇后の洋装化を目の当たりにした梅子の反応が、同じ船にのって米国に渡り、また住み込みで家庭教師兼通訳までした伊藤博文への直截な批判となって噴出していた点は注目に値する。

一八八六年一一月二三日付で梅子がランマン夫人に宛てた書簡には、華族女学校での昇格と昇給についての言及がある。準奏任官から奏任官に昇格し、年俸が五〇〇円になったという「ニュース」を知らせている。一年も経たないうちに昇給があった教員はそれほど多くはなかったようで、下田歌子と津田梅子だけが奏任官にあたる女性であり、きわめて名誉であることを伝えていた。一方で、「おそらく伊藤氏は洋装にお金がかかることを理解し始めたのだと思います。奥様やお嬢様達が洋装を取り入れたので、洋装をするには、月給三五円では少なすぎると気付いたのでしょう。だから昇給したのだと思います。」[12] と洋装化を推進する伊藤に皮肉めいた解釈も記していた。

一八八七年一月一四日付の書簡には、新年の行事での

「荘厳に見えた」皇后の洋装について伝聞したこととしてコメントが記載されている。ヨーロッパから取り寄せられた毛皮やレースがあしらわれたフルトレインのドレスだけで二万ドルはかかり、ダイヤモンドや宝石類も荘厳だったという説明の後、「私がただ懸念するのは過度な浪費になってしまわないかということです。日本は貧しい国ですから、そのような支出に耐えられず、貧しい人々が困窮してしまわなければよいがと思います。」[13]と梅子は思いの丈を打ち明けた。宮中での新年の行事に参列した女性は洋装をしたが、多くは謁見するにふさわしい洋装がないため出られなかったとも述べている。梅子自身も参列が要請された場合にはふさわしいドレスが必要であるが、あまりにも高価なものになるので、そのような場には行かないで、華族女学校のようなもっと非公式な場で謁見することで控えておきたいと憶断を下した。国家行事で宮中に参内する場合、正装用の宮中用の洋装が必要となるので、多くの女性が恐れをなしているし、どうしてこんなに洋装を採用していかなくてはならないのだろうとランマン夫人には自由な批判を展開したのだった。「彼らは（筆者註：伊藤を始めとする政府関係者を指していると思われる）、どうして洋服ではなくて学校や社会を改善することを考えないのだろう。和服はとても美しいのに、多くの人々の話を聞くにつけ、私はそのことが本当に残念だ。」と。[14]

一八八七年七月二〇日付書簡には華族女学校の終業式についての記載がある。式に皇后、政府高官、伊藤夫人らが臨席したことが記されているが、生徒、宮中の方々、来訪者、皆が洋装で、「皇后は薄いピンクの絹を着用され本当によくお似合いでした」と書かれていた。[15]

一年間千円という官費を費やされた最年少の女子留学生として六歳から一七歳までの一一年という時間を米国で過ごした津田梅子は、アメリカの中産階級のハビトゥスを身に付け、洋装に慣れ親しんだ者としての視点から、国粋主義者やあるいは欧化主義者を含む日本の人々とは異なる理解と感性を洋装に対して持っており、西欧からの批判についても高いアンテナと語学力を持っていたからこそ、米国での育ての母への私信という限られた空間において、洋装化をめぐって自由な批評を展開したと考えられる。

東京慈恵医院（有志共立東京病院）開院式行啓

一八八七年五月一三日付の津田梅子からランマン夫人に宛てた書簡には、美子皇后の東京慈恵医院開院式行啓（一八八七年五月九日）についてと思われる記載がある。

一昨日、婦人慈善会によって創立された病院への皇后の行啓がありました。婦人慈善会は二度バザーを開

催したのを覚えていますよね。慈善会の女性全員が招待されましたので、私も何人かの女性たちとご一緒に参りました。……皇后はすべての病棟を見学されすべての患者と建物を見て回られたのですが、これは未だかつてないことのように思われました。とても長く滞在されましたし、改築は予定されているらしいのですが、それほどきれいでもない建物のすべてを私達も皆見て回ったのです。慈善で成り立っている医院なので、社会の底辺の本当に貧しい方々を始めとして、いろいろな人々が入院しています。皇后はそのような方々お一人おひとりすべてにお会いになったのです。本当にあまりないことですよね。私自身、病を患っている方達にお会いするのはあまり楽しいことではありませんでした。[16]

若いアメリカ人女性が記したような感想だが、この時津田梅子は二二歳である。看護事業に強い関心を持っていた捨松が推進した「鹿鳴館慈善バザー」は、伊藤夫人や梅子も協力し、一八八四年に開催された。[17] そのバザーで得られた収益の全額が、有志共立東京病院に寄付された経緯がある。当時の梅子の記録から、貧しく、病む者一人ひとりに配慮する皇后の行動に社会福祉への関心の高さが見て取れる。

アリス・ベーコン

一八八八年には山川捨松の留学時のホストシスターであったアメリカ人女性のアリス・ベーコンが、華族女学校に招聘され一年間教員として勤務することになる。アリスは梅子と一軒家を借り、半分は西洋式に、半分は和式にして暮らした。アリスが日本で経験したことは家族に手紙で知らされ、後に、*A Japanese Interior*（『華族女学校教師の見た明治日本の内側』久野明子訳）として出版された。[18] アリスは、日本の文化や習慣について、同居していた梅子やホストシスターであった捨松から様々な説明や助言を得ていたことが本書から窺える。アリスが教員をしていた時にも皇后の行啓があり、その日のことが本書にも詳述されている。[19] アメリカ人であるアリスが皇后について、「彼女の顔は、私にはとても悲しそうで、何かを耐え忍んでいるようにさえ見ました。彼女は知性が高く、力強く、すばらしい性格の方だと言われています。[20]」と記していたのが印象的だ。

アリス・ベーコンは華族女学校での一年の任期を終え、一八八九年に米国に戻ったが、二度目の留学を果たした津田梅子を一八九〇年の夏の間、バージニア州ハンプトンの自宅に呼び寄せ、梅子の協力を得て *Japanese Girls and Women*（『明治日本の女たち』矢口祐人・砂田恵理加訳）を著し

た。本書には、「宮廷の世界」という一章が設けられている。[21] 共著者として背表紙等に津田梅子の名前は掲載されてはいないが、アリスは印税を折半し、遺言には本書の著作権を梅子にと述べるほど、共同作業によって完成された著書である。本書は、英語圏において出版された日本女性についての最初の図書であり、一三版まで増刷が繰り返され、米国等において影響力を及ぼした。改訂版の当該の章には、次のような記述がある。

一八七一年、日本の将来を担うのにふさわしい教育を受けるために、士族出身の五人の少女がアメリカへ留学することになったが、皇后は離日直前の彼女たちに謁見（ママ）した。それから二〇年間、皇后は変化と進歩を続ける社会の中で、常に日本女性の地位向上のために尽力されてきた。宮中で保守派と改革派の激しい攻防が続くなか、彼女が日々どれほどの苦労を強いられているかは、宮廷の内情に通じる者のみが知っている。天皇、皇后の周囲にいる者は、卑しくて些細な嫉妬心にかられて行動することが多い。皇后のちょっとした一言や行為を、自分に都合よいように利用しようとする。けっしてひとつにまとまろうとはしない取り巻きのなかで、無用な対立を避けつつ、社会の進歩のためにたゆまぬ努力を続けるのは、戦争で勝利をおさめるよりも難しいことである。そのために皇后はいつも忍耐強く、深い思いやりと愛情をもっていなければならなかった。そのすてきなお人柄にまつわる逸話は枚挙にいとまがないほど、国民の敬愛を集めている。[22]

津田梅子は、下田歌子とともに華族女学校の奏任官の教員として、相対的にではあるが「宮廷の内情」の近距離に置かれていたと言える。また、捨松の姉・操が美子皇后の女官をしていたこともあり、アリスと梅子は捨松を通しても得られた情報を以上のような言説として纏め、英語圏の読者に、「日本女性の地位向上」の推進者として皇后を位置付け、発信した。この後に、いくつか具体的に紹介されている「そのすてきなお人柄にまつわる逸話」も示唆に富むので参照されたい。

おわりに――津田梅子の決断

津田梅子の生涯には、いくつかの大きな岐路があった。華族女学校に関して言えば、以下の二つの時点で、梅子自身、大きな決断をしなければならなかった。すなわちそれらは、華族女学校から有給の研修期間を得て二度目の留学でブリンマー大学に学んだ際、帰国前の一八九二年、生物学の研究者としてブリンマー大学に残るポストを恩師のM・ケアリ・トマス先生から提案されたとき、そしてもう

一つは、一九〇〇年、高給と高い官職の地位を約束する華族女学校を辞してでも、自分自身の教育方針に則った私塾を創設するときである。梅子は、前者においては、ブリンマー大学での恩師であったトマス先生を憤慨させ華族女学校に戻る選択をし、後者においては、華族女学校関係者と多くの軋轢を経験し、本校を去る決断をした。

最終的に津田梅子は、二度の米国留学の経験を経て、黒田清隆、森有礼、あるいは伊藤博文等の明治の男性指導層には構想できなかったような、新たな女性の役割を先導し、経済的にも自立できる女性の育成を自身の私塾で展開することを目指した。美子皇后の尽力について、「社会の進歩のためにたゆまぬ努力を続けるのは、戦争で勝利をおさめるよりも難しいことである」と上記の著書で梅子の盟友アリスは断言した。一九〇〇年七月、梅子は「退路を断って」、一五年間奉職した華族女学校を辞した。その直後、ブリンマー大学時代の友人や恩師宛の書簡の中で、保守主義や官僚主義に決別できる喜びに加えて、「自分で正しい、真実と思うことに基づいて行動できることがどんなに嬉しいことか」と、「自由」を謳歌する言葉を綴った。[23]

津田梅子
女子英学塾 開校当時の肖像
（1901 年頃）

この決断は、合計すると一五年間に渡る米国留学や渡英生活で吸収した欧米の「文明」をめぐる彼女なりの果実を、明治政府や教育界の男性指導者の思惑に左右されることなく、自分自身が「正しい」と思う方法で、確実に日本の女性たちに届けたいという津田梅子の強い意思の表れでもあった。「日本女性の地位の向上」の牽引者として美子皇后を敬愛しながらも、三五歳の津田梅子は華族女学校教授という官の身分を離れて、民の立場から私塾を創設し、残りの半生を賭けて女子教育に尽力しようときっぱりと決意したのだった。奇しくも二〇一四年は、津田梅子生誕一五〇周年の年に当たる。

註

（1）津田梅子の米国留学の経緯等について詳細は、拙著『津田梅子の社会史』（玉川大学出版部、二〇〇二年）を参照されたい。

（2）「開拓使建議書」津田塾大学編『津田梅子文書』改訂版、津田塾大学、一九八四年、八二頁。

(3) "Japanese Women Emancipated: The Leavetaking from Which Dates the Larger Liberty of the Sex," *The Chicago Record*, February 27, 1897,『津田梅子文書』七七―八四頁。

(4) *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother* ed. Yoshiko Furuki et al., (New York: Weatherhill, 1991), pp. 230-231.

(5) *The Attic Letters*, p. 240.

(6) *The Attic Letters*, pp. 253-254.

(7) *The Attic Letters*, p. 253.

(8) 若桑みどり『皇后の肖像―昭憲皇太后の表象と女性の国民化』（筑摩書房、二〇〇一年）。

(9) 若桑『皇后の肖像』五六頁。

(10) *The Attic Letters*, p. 256.

(11) 若桑『皇后の肖像』五八頁。

(12) *The Attic Letters*, pp. 268-269.

(13) *The Attic Letters*, p. 274.

(14) *The Attic Letters*, pp. 274-275.

(15) *The Attic Letters*, pp. 292-293.

(16) *The Attic Letters*, p. 287.

(17) 久野明子『鹿鳴館の貴婦人大山捨松―日本初の女子留学生』（中央公論社、一九八八年）一八二―一八九頁。

(18) Alice Mabel Bacon, *A Japanese Interior* (Boston: Houghton, Mifflin, 1893).

(19) アリス・ベーコン『華族女学校教師の見た明治日本の内側』（久野明子訳、中央公論社、一九九四年）一四八―一五四頁。

(20) 前掲書、一五二頁。

(21) Alice Mabel Bacon, *Japanese Girls and Women* (Boston: Houghton, Mifflin, 1891, 1902). 翻訳書は、一九〇二年の改訂版を底本にしている。アリス・ベーコン『明治日本の女たち』（矢口祐人・砂田恵理加訳、みすず書房、二〇〇三年）。

(22) ベーコン『明治日本の女たち』一二五―一二六頁。本引用の後半部分は改訂版の註の中で補足されている。

(23) Abby & Emily への書簡（一九〇〇年八月六日付）、『津田梅子文書』三七五頁、Miss Thomas への書簡（一九〇〇年八月九日）同書、三八九―三九〇頁

（津田塾大学学芸学部教授）